

頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム  
—アジア・アフリカ持続型生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築—  
報告書

マウドゥーディーの出版活動と思想  
—パキスタンにおけるイスラーム復興とウルドゥー語—

派遣者：須永 恵美子

派遣期間：2014年5月12日～9月26日

派遣先：マークフィールド高等教育研究所（イギリス）

キーワード：パキスタン，マウドゥーディー，出版，ウルドゥー語，イスラーム復興

## 1. 研究課題について

派遣者の研究は、パキスタンの国語とイスラーム思想を担う出版文化がどのように拡大してきたか、宗教家マウラーナー・マウドゥーディー（1903-1979）の書籍を題材に、その史的展開を追うものである。マウドゥーディーは20世紀中盤にパキスタンで活躍したイスラーム思想家・政治家であり、150冊以上のウルドゥー語の著作を残している。具体的には、マウドゥーディーが出版物をどのように使い、何を広めてきたのかを問うため、宗教書を例にそのモノと思想コンテンツを明らかにする。さらに、宗教と言語がどのような関係にあるのか、ウルドゥー語の単語の選択をアラビア語、ペルシア語の関係性から実証する。以上の三段階を経て、ウルドゥー語のメディアに乗るイスラームの性質を問うことが、本研究の目的である。

## 2. 派遣の内容

イギリス中部のレスター市郊外にあるマークフィールド高等教育研究所に滞在し研究をおこなった。研究所では博士課程の院生と同室の研究室を与えられ、日中は研究室や図書館で過ごした。キャンパス内に住む教職員とは日常的に面会し、様々なトピックについて議論を交わした。キャンパス内にはカンファレンスホールや宿泊施設もあり、週末には各種団体が講演会や研究合宿を開催しており、それらの活動にも参加した。



写真1: マークフィールド高等教育機関キャンパス構内

また、同じキャンパス内にあり、イスラーム系の研究機関であるイスラミック・ファウンデーション

では、研究所長である Dr. マナージル・アフサン・ギーラーニー教授や、同研究所を創設した Dr. フルスィード・アフマド教授らに面会し、複数回にわたってインタビューをとることが出来た。両氏は、マウドゥーディーの生前をよく知り、学術・出版面での活動に関わってきた。



写真 2: イスラミック・ファウンデーションの外観

8月25日には、ダラム大学の国際ワークショップに参加した。ダラム大学ではイスラーム経済を先行する研究者や大学院生を前に、マウラーナー・マウドゥーディーの経済関係の書籍に関する発表を行った。さらに、9月11日には研究所内の博士課程の教員や院生を前に、研究発表を行った。この場では南アジアにおける啓典解釈学の展開について発表し、活発な議論を交わすことが出来た。



写真 3: ダラム大学の国際ワークショップでチェアをする派遣者（右）

### 3. 派遣中の印象に残った経験や体験

今回の派遣では、7月にイスラームの断食月であるラマダーン月を迎え、同期間特有の数々のイベントを体験することが出来た。同期間中はキャンパス内のモスクに通常よりも多くの人が集まり、特別な説教や礼拝を見学することが出来た。また、キャンパスを一般開放して行われるラマダーン月開きの集会に向けた準備などを通して、キャンパスの近隣の住民とも親しくなり、様々なインタビューを採ることが出来た。

また、研究所内で行われた聖典クルアーンの勉強会やアラビア語講座などにも参加し、英語圏におけるイスラーム学の修得・学習の過程を垣間見ることが出来た。

さらに、同研究所はイギリス国内のイスラーム関係の研究所の一大拠点として認知されており、様々な研究者が同キャンパスを訪れており、イギリス国内に居ながらにして各地の研究者と会うことが出来た。特に、マウドゥーディーの啓典解釈書を英訳し、自身も啓典解釈学者として著名な A.R. キ

ドウィー教授と面会し、私の研究に関して数々の有益なアドバイスをいただいたことは光栄であった。



写真 4: 研究所内のモスクの様子

#### 4. 目的の達成度や反省点

今回の派遣の反省点としては、同研究機関の附属図書館が所蔵するウルドゥー語書誌を網羅しきらなかったことにある。同図書館は、マウラーナー・マウドゥーディーに関するウルドゥー語の書籍を初め、アラビア語、英語の図書を中心に所蔵されている。特に、イスラーム金融系の書籍や、ウルドゥー語の雑誌については幅広いコレクションが収められている。しかし、到着時点でたてた資料読解の計画に対し、予定以上に平日・週末の会合や講演会、イベントが多く、時間を捻出できなかったため、すべての書誌に当たることが出来なかった。人脈形成という点では、これらの講演会に多く出席できたことが今後の研究に大いに役立つことが予想されるが、研究の進捗状況の中盤で一度確認し、新しい資料の収集の計画を再考する余地はあったと思われる。

研究全体としては、予定していた研究テーマについての資料収集と分析を行い、国際ワークショップの場で発表するに至ったため、概ね目標が達成された。さらに、2015年に予定されている国際ワークショップにおいて、これらの成果を発表する予定である。